
たぬきがたぬきでないたぬき

篠田 一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たぬきがたぬきでないたぬき

【Nコード】

N1723A

【作者名】

篠田 一郎

【あらすじ】

マモラートのマモルくんは、人間に指差され、言われた。「たぬきだー」自分はマモラートなの？たぬきという動物なの？自分探しの小さな旅です。

たぬき？（前書き）

つたない話で、どこに落ち着くか不安ですが、頑張ります。

たぬき？

マモラートという動物は、ずんぐりしているわりになかなかはしこい。

森の下ばえを縫うようにして走るマモルの動きも軽快で、小動物としては優秀なスプリンターになれそうだ。

朝露に濡れて体毛や尻尾がしぼんでいたが、そんなことは気にならなかった。走るのは大好きだ。

もちろん、すべてを忘れるわけじゃない。

時折り立ち止まり、体を起こして後ろ足で立ち、少しでも高いところの風の匂いを嗅ぎ、見える範囲内に危険な兆候がありはしないかと確かめること、これだけは絶対に忘れてはいけないのだ。

巣穴は巧妙にカモフラージュしてあって、愚鈍な人間なんかには見つけれっこないが、尾けられたりしたら大変だ。それにカンドウスの気配には要注意だ。

人間に縄かけられたカンドウスなら問題はない。だが野良カンドウスときたら、速くて大きくて群れていて、襲われたらまずひとまりもないらしい。野良カンドウスといえば一匹狼のクロしか知らないが、なるほどあんな乱暴者が群れたりしたらとても手がつけられないや、と、話を聞いたときにはマモルの体毛が逆立ったものだ。危険な兆しのないことを確認して、マモルは巣へ向かった。

それにしても、と頭の中はハテナマークでいっぱいだ。

あの人間の子供の言った言葉、初めて聞くな。お父さんに聞いてみよう。

「遅かったじゃないの」

お母さんの声は怒っていないが、顔が怒っていた。

「隣の巣のスグルくんは、とっくに帰ってきてますよ」

お父さんは奥で伏せ、目を閉じている。そのふさふさの体にマモルの兄弟たちが寄りかかって、もう船をこいでいた。太陽が出てい

る間はおやすみの時間なのだ。

「スグルくんはスグルくんだろ。僕は、ちょっと寄り道してたんだ」

「どこへ行っていたの」

「いいじゃないか」

マモルは小さくて丸い耳をひくひく動かした。考え事をしている時の癖で、自分でわかつているのにやめられない。

マモルの耳を見て、あらまあとお母さんは驚いた。

「今ごろになって言い訳を考えてるの。呆れた。お父さんだって、若い雌マモラートに見とれた時なんか、見とれる前から言い訳を用意しているっていうのに」

お父さんのいびきが大きくなった。間違いない。話を聞いているマモルは思うのだ。お母さんに勝てないのは知ってるよ、けどたまには子供を援護してくれる頼もしい父親になってほしいんだ。

今日も願いはかないそうにない。

「言い訳じゃないよ、それ以外の考え事なんだ」

「当ててみましょうか」

お母さんは短い前足で鼻をこすった。

「隣山のアカリちゃんのことでしょう。今日だって、アカリちゃんと会ってたんじゃないの」

びっくりして、小さな丸い目がぐりぐりした。

なんでアカリちゃんのことを知ってるんだろ。

「ち、違うよ」

「あら、そうなの。ただ、言っておかなきゃいけないけど。アカリちゃんはフォトスターなの。あなたとは種族が違うの。お友達以上の関係は、望んでも悲しみばかりが深まっていくんだから」

「アカリちゃんとはそんなじゃない」

心と心を通わせたとても美しい関係なんだ。と説明しようとしたが、子供を六匹も生んでいるお母さんに話しても、たぶん理解してくれないに違いない。

「山を降りてたんだ」

アカリちゃんの話を持ち上げさせるために、怒られるのを覚悟で本当のことを言った。

「人間にどれくらい近づけるかっていう遊び。スグルくんは一匹で逃げたんだ。臆病者さ」

なんてこと、とお母さんはほっぺを撫でてからひげをぴんぴんに立てた。

「何度も言ったでしょ、人間に捕まったら皮を剥がされて置物にされるか首巻きにされるのよ。肉は鍋へ直行よ」

「捕まったりしないよ、あんなグズなやつらに」

「鉄砲っていう、卑怯な飛び道具の話もしたでしょ。長老のモン兵じいさんがヒス起こして投げてくる枝とはモノが違うのよ」

モン兵じいさんはむかし人間に飼われていた動物だ。逃げてきた方がいいが、森の中には同じ種族がないものだから、今もやもめ暮らし、時々ヒステリーを起こして、キーキーわめきながら枝やら小石やらを投げまくる。こいつで怪我した者も少なくない。

もちろん、鉄砲がモン兵じいさんの枝より恐ろしいのは知っている。だが、「かやく」だとか「てつ」の臭いがすると教えられている。そんなのに撃たれるほど馬鹿じゃない、とマモルはふくれた。

お母さんの小言が頭の上を飛び交っている。言葉というものもろし目に見えて、しかも固かったら、きつと今ごろマモルの体はずたずたのぐちよぐちよだ。

「そんなことよりも」

「そんなことじゃありません」

お母さんにぴしゃりと抑えられながらも、マモルはさきほど人間の子供に聞いた不思議な言葉を口にした。

「たぬき」

びたり、とお母さんの動きが止まった。

恐る恐る見上げてみると、お母さんの顔が凍りついている。

「おお、おお、なんてことでしょう、マモルや、ああ、マモルや」

「前に芝居小屋に忍び込んだときの真似？変だったよねー、あの人

間」

「ど、どこで聞いたの、その言葉」

「どこって、人間の子供がぼくを指差して言うんだ。たぬきだー、
って」

「に、人間なんて頭がからっぽですもの、動物違いをしたのでしょ。
それにしても、たぬき、だなんて、そんな、かつこ悪くて間抜け
な面白おかしい名前、どこをどうひねくり回したら出てくるんでし
よ」

「そんなに変な言葉かなあ」

「変ですよ、みょうちくりんですよ」

ねえあなた、と珍しくお母さんはお父さんに助けを求めた。

しばらく、お父さんは考える素振りをしてから、むくりと起きた。
眠っている子供たちは起こさないように気を使っている。お母さん
は怖いけど、お父さんはやさしい、がマモルの一家だ。

「その時が来たようだな、母さん」

お父さんは両前足をこすり合わせながらしっぽをぶんぶんさせた。

「マモル。大事な話だ。最後まで黙って聞きなさい」

お父さんがそう言う時は、とても重大な話が始まる。木の実の選
び方や、獲物の捕らえ方、誰の目をも欺く死んだフリの演技指導。
しかし、たぬき、そんな大切な言葉とは思えないんだけど。

たぬき？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

それが、なに？

「我々はマモラートだ」

お父さんはいつもと違ったおごそかな雰囲気で話し始めた。

「これは大前提だ。お前もお父さんも生まれてから死ぬまで、一瞬一秒も変ることなくマモラートなのだ。

あるいは、自分はマモラートじゃない、もしくは、ただのマモラートじゃない、そんなことを思うかもしれないが、それは幻想だ。

お前はマモラート以上ではなく、マモラート以下でもない」
当たり前の話だ。

マモルはちよつと拍子抜けしてうなずいた。が、お父さんの口から「さて、ためき、だが、」という言葉が出てきて耳をつんと立てた。

「人間は、我々マモラートを、ためき、と呼ぶのだ。

わかるか、人間にとって、マモルや、お父さんお母さんや隣の巣のスグルくん、みんなの名前はマモラートではなく、ためきなのだ」
「！」

「ためきなんてッ！」

お母さんが汚いものを投げ捨てるように吐き捨てた。

「屈辱に思つかもしれぬ。悔しくて腹立たしいかもしれぬ。しかし、自分はマモラートなのだ、その誇りを抱いて、心に打ち勝て。

いいか、克己とは己れに克つと書くのだ」

涙する両親を前に、若きマモラートは困っていた。

どういう話だったんだろう？ ぼくが子供だから理解できないんだろうか……言葉が見つからない。

「それって、つまり、こういうこと？ ううん、ぼくなんか理解できる話じゃないのはわかるんだけど、ぼくなりの解釈なんだ」

考え考え、マモルのぐりぐりまなこが宙をさ迷った。

「人間は僕らを、ためき、って呼んでる」

「うむ」

「ぼくらは自分のことを、マモライトって呼んでる」

「うむ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「それって、大事なことなの？」

さっぱりした顔でマモルは言う。本心からそう思う。

人間なんかはどう呼ばれたって、全然気にならない。なんでそんなに目くじら立てるんだろう。大人って不思議。

ふ、とお父さんは笑った。

「さすがはわが子だ。すでに壁を乗り越えていたか」

「わかりませんよ、子供だから」

お母さんはマモルの淡泊な反応に不満げだ。

「子供だからですよ。まだわからないんです」

マモルは「もう寝ようよ」とあくびした。ふああ、が、ふあああ

ああああ、なった。

考えごとは苦手だ。

「眠いや」

きつね？

巢は大きくぬぎの根元にあるうろで、中は大きく出入り口は小さい。巢穴は居住性とともに隠密性もとめられるから、この点、隣の巢より上等だ。凄いぞ、お父さん、とこの点に関しては父親を褒めたたえるマモルだ。

夕方になって目覚めたマモルは、スグルくんに会いに行こう、として、今朝の言い争いを思い出した。

スグルは言うのだ。人間に近づこうなんて馬鹿げてる。

マモルは言った。そんなの臆病者の理屈だよ。

なんだか素直にスグルに会いにいけない。気まずいって、こういうことを言うんだな、と実感してしまう。

そうだ。

マモルは思い立った。

コン吉おじさんに会いに行こう。

理由は、ええと、そう、たぬきという言葉について。

マモルは山を駆け下りていった。

山肌には、山自体を幾重にも縛り上げたみたいに、何本も道路がへばりついている。人間の住む家もところどころあり、それらを避けて降りていくと、狭い盆地に出る。

まるで、山肌と盆地とにべったり張り付いたような人間の集落があつて、そのはずれにコン吉は住まっている。

フォトスターのコン吉はみんなから嫌われていた。

正確には大人から。

よそ者で、嘘つきで、自分より頭のいいやつはいないんだと言つてはばからず、動物を動物として見ていないところがある。

とは、マモルのお父さんの談だ。

だけど、マモルはコン吉が嫌いになれない。

そんな子供はたくさんいた。

コン吉は自分の波乱万丈な思い出話を聞かせてくれる。子供たちは、その冒険譚を聞くために、親に怒られても彼の元へと出向くのだ。

コン吉の長く突き出た鼻には一筋の傷跡があつて、昔、人間と大立ち回りをしたときにつけられたものらしい。大きくとんがった耳も片方欠けていて、そっちは野良カンドウス退治のときのものだ。

だいたい色のシャープな体、足は長く尻尾も立派で、二ヒルな笑みを浮かべたら、きつとアカリちゃんもいちころだよ、とマモルはちよつと妬いていた。

集落から少し離れた家屋の近くに、コン吉が腰を据えているのは知っていたから、探すのに苦労はなかった。

「いよう、マモル」

茂みに身を低くしていたコン吉が、いつものようににやりと笑った。

「こんなとこに来て、母ちゃんにケツかじられても知らないぞお」

「知らないよ、お母さんなんか。ぼくはもう子供じゃないんだ」

「自分のことをボクって呼んでる間はネンネさ。どうした、スグルと喧嘩でもしたのかよ」

図星を突かれて押し黙ると、コン吉はけけけと笑って、彼の伏せる丘から見下ろせる人家へ目をやった。

老婆が縁側に腰かけて、膝の上の小さな動物を撫でいてた。

あれはミーアフーナだろうか。

「喧嘩しろ、喧嘩しろ」

コン吉ははやし立てる。

「仲直りするたんびに、人間で言うところのレベルアップが待ってるぞ」

れべなんたらが何なのか、マモルにはわからないが、コン吉おじさんの言うことだから、きつと喧嘩はいいことなのだろう。

「今日はどんな話が聞きたい？」

コン吉は鼻をひくつかせながら訊いた。

「海の話は前にしたっけ。うむ。グラマーな野良カンドウスと組んで、悪徳ペットショップのからくりを暴いた話なんて、どうだ」

「おじさん、たぬき、って言葉、知ってる？」

コン吉の鼻面がこっちを向いた。

「ええと、なんだそりゃ」

「おじさん、ええと、なんて言ったら、わかつちやうよ、嘘」

コン吉の鼻面がバツが悪そうに明後日の方を向いた。

「ねえ、おじさん」

「きつねだ」

「え？」

マモルは耳を立てて文字通り聞き耳を立てた。

「きつねだ？」

「きつね。俺は人間にそう呼ばれてる」

とつとつと、コン吉は仕方なさそうに話し出した。

「きつね。ずるがしこくて小心で、いかにも悪どい真似してそうないやな名前だぜ。俺はとらの皮かぶったことは一度もねえ」

「とらって？」

「そういう動物がいるらしい。俺も会ったことがねえんだ、もしかしたら人間の妄想の産物かもな。ほら、言っだろ、一匹狼、の、おかみの部分。見たことあるか？」

「うっん」

だろ、というふうにならずいて、コン吉は鼻面でマモルの背を撫でた。

「くすぐりたいよ」

「でもな、きつねなんて、まだマシだ。マモル、お前は人間に、たぬき、なんて呼ばれてるんだぜ。」

たぬき。

ひどいもんだ。なんてぶさいくな名前だ。間抜けな響き、面白おかしいぜ。そんな格好悪い名前つけられたら、俺なら自殺するかもしれないねえ」

なんだかひどい言われようだ。背中を撫でられて気持ちいいけど、誤魔化されちゃいけないぞ、とマモルは思った。

「でもなんで、二つも名前があるの？」

コン吉はふと動きを止め、あらぬ方を眺めた。

「俺たちをおとしめるためさ」

言葉が難しくてマモルは「なに？」と訊いた。

「いわゆる蔑称ってやつさ」

「蔑称？」

「やつらは自分が一番上だと思ってやがるのさ。」

俺たちを見下ろして、お前たちは『きつね』だ。フォトスターじゃない、『きつね』程度の存在なんだ、そう決め付けてるんだ。

いいか、俺たちのフォトスターの誇りや名誉を傷つけ、屈服させようとしてるのさ」

ますますわからない。

呼び名が変わるだけでそんなに問題なんだろうか。おじさんはおじさんなのに。

「勝手に名前をつけ変えるってのは、支配者にしか許されないことなんだ。」

名前を変えて、『はい、あたしや今日からきつねです』っていうのは、屈服したあかしなんだ。

だから、絶対に、自分がきつねだなんて認めちゃいけない。

俺はフォトスターのコン吉なんだ」

おまけによう、とコン吉はまたマモルの背中を撫でる。

「たぬき、なんて、ああ、ひでえネーミングセンス、悪意を感じるぜ」

そうかなあ、とマモルは考える。

たぬき。かつこいい名前とは、マモルも思わない。しかし、それほど悪いものだろうか？・・・わからない。

試しに分解してみる。

た・ぬ・き。

ダメだ、やっぱりわからない。
「むう」
コン吉が動いた。

ねこ？

見ると、縁側から人間の老婆が消えていた。ミリアーナだけが丸まっている。

「人間にとつちや、そろそろ三食目の時間だ。終わった頃に降りるぜ。俺様用のメシをあのおさんが用意してるはずだからよ」

「あそこにいるの、ミリアーナだよね」

縁側の動物のことだ。

「ああ、ミリアーナのナオ子だ。あの家に間借りしてる」

「ミリアーナも、たぬき、って呼ばれてるの？」

コン吉はかぶりを振る。「ねこ、だ」

ねこ。口の中でつぶやいて、マモルはちよつと考えた。

「ナオ子さんも、ねこって呼ばれるの、いやなのかあ」

「さあな。あ、おい」

茂みを飛び出したマモルは、首だけ振り向かせて

「ナオ子さんにも聞いてみるよ」

と畑の上を走り出した。

しょうがねえなあ、とコン吉も茂みを出て、ゆつくりとマモルの後を追っていく。

マモルは走る。走る。

走るのは好きだけど、今は、人間に見つからないように一生懸命だ。

ナオ子は、全身の真っ白な毛をふっくらさせて、縁側で丸くなっていたが、マモルの接近に気付くと耳をひくつかせ、長い尻尾をぶるんと振るい、首をもたげた。

ひげがたるんでみんな前を向き、開いた目も眠たげだ。うんと前足を伸ばしてあくびをし、後ろ足をたたんできちんと座った。

「なんだい、坊や。そんなに急いでさ」

大急ぎで庭を駆け抜けたマモルは、縁側の下に潜り込んでから顔

だけを出した。

「人間に見つかったら大変なもの。あー！おじさん、そんなにのんびり歩いてたら丸見えだよ」

「速く走れば消えるってわけでもなかるうに」

上からナオ子の艶っぽい声が聞こえる。

ナオ子を見たところ若く見えたが、声には大人らしい落ち着きがあつて、どこかはすっぱな印象がある。

なんだか色っぽいお姉さんだなあ、とマモルは板一枚隔てて漂ってくるいい匂いに瞬間うつとりしてしまった。

「お姉さんがナオ子さん？」

「よく知ってるね。あのエロぎつねに訊いたのかい？」

ナオ子はくつくつ笑う。「坊やは？」

「マモル」

名乗ってから、マモルはおや？と思った。

「今、きつね、って言った？」

「コン吉のことだよ。あいつ、あたしのこと狙ってんのさ。いぬ科のくせに、ねえ」

「いぬ？」

「ああ、野生系の子供じゃわかんないかね。カンドウスだよ。人間はやつらをいぬって呼ぶのさ。きつねは、あたしらねこより、いぬの血筋に近いからねえ」

訊きなれない言葉が頭の中でぼんぼん跳ね回っていた。

いぬ、ねこ、きつね。

血筋の話はお父さんに聞いたことがあるので理解できなくもない。わからないのは、耳慣れない人間の言葉をすらすらと並べ、笑っているナオ子の態度だ。

「ナオ子さんは平気なの？」

少し間があつて、上がつておいでよ、とナオ子の声が降ってきた。「辺りに人はいない。そんなところで亀みたいに縮こまってたんじや、話なんかでないよ」

おじさんは、と見ると、呑気に畑の作物へ鼻をくつつけている。度胸があるなあ、とマモルは感心してしまった。

縁側に飛び乗ったマモルを、ナオ子はうずくまって見ていた。マモルが気恥ずかしくて首をすくめると、楽しそうに尻尾を振るう。

「この辺りじゃたぬきが珍しいってこともないけど、子たぬき一匹つてのはあまり見ないね。親とはぐれたのかい？」

「おじさんに会いに来たんだ」

ああ、とナオ子は畑のコン吉を見やり、まだ眠いのか一つあくびした。

「そっぴや、あいつのホラ話を聞きにくる子供がいるようだね。」

けど、一匹で里まで降りてくるなんて、度胸は買うけど感心はできない。

次に来るときは、友達をたくさん連れてきなよ」

「ナオ子さん、やさしいんだね」

「なに言ってるんだい。人間に見つかったとき、友達を犠牲にしな、って言うてるのさ」

マモルは思わずぐくりと唾を飲み込んだ。

人に見つかったとき、カンドウスに追われたとき、けして後ろを振り返ってはならない、と巣では教えられる。たとえば友達がいても、親や兄弟がいても、気にせず全力で走りなさい、と。彼らの一匹が犠牲になっている間に、逃げなさい、と。

もつとも、マモルはそこまでの危険に遭遇したことがなくて、訓戒もただのお話という感覚なのだが、初めて会った動物にさらりと言われると胸がドキッと跳ねてしまう。

もう、スグルくんと山を降りるのはよそうかな。

ナオ子は、マモルのよく動く表情を目を細めて観察している様子だ。それで、と、マモルの動揺がおさまった頃に口を開いた。

「なにが平気だった？」

「あ、そうだった。ナオ子さんに、聞きたいことがあったんだ」

ナオ子はちよつ、と起き上がって右前足を舐め、それで顔を洗っ

てまたうずくまった。さつきよりしゃんとした顔になった。

「ナオ子さん、ねこ、って呼ばれてるんでしょう？そのことで、腹が立ったり、悔しくなったりしないの？」

「なんで？」

逆に聞き返されて、ただでさえ色っぽいお姉さんの前というのでうろたえているというのに、マモルはさらに慌てた。

「だって、お父さんもそうだし、コン吉おじさんも、悪い名前で呼ばれて怒ってるみたいだし」

ふうん、とナオ子は作物に噛み付いているコン吉を流し見て、小さく鼻を鳴らした。

「あのコン吉になに言われたの」

「え。ええと・・・」

コン吉から聞いた話をあらかた話すと、ナオ子はフーツと不機嫌そうに息を吐き出し、しばらくコン吉を睨んでいた。

「子供になんてこと吹き込むんだい、あのエロぎつね。」

いいかいマモル、あのくそぎつねの言うことなんか、真に受けちゃいけないよ。

あいつはね、いっぱしの思想家ぶったテロぎつねで、ホラで女子供騙すたらしのエロで、ただメシ食らいの大泥棒なんだ」

喋っている間に感情が高ぶっていったのか、ナオ子はやおら立ち上がると、畑を掘り返しているコン吉へ鋭く叫んだ。

「そのくらいにしときなッ。」

あんた誰にメシ食わせてもらってると思ってるんだい。じいさんばあさんが汗水垂らして丹精込めたその畑が食い扶持だって、わかんないわけじゃないだろ。

そういうのを無差別テロって言うのさ。

人間が憎けりや都会に行って堂々と相撲してきたらどうなんだ、ええ」

突然の啖呵にぼかんと口を開けていたコン吉は、すぐにクワと牙をむき出して

「なんだとこのあばずれが」

と姿勢を低くかまえた。

ナオ子の方も、なんだい、と上体を屈め、尻を左右に振ってリズムを取り、威嚇している。

マモルがおろおろしていると、真っ先にナオ子が気付き、次いでコン吉がなにやら察したようだ。

コン吉はさつと身を翻し、ナオ子は、マモルの首筋をくわえて縁側を飛び降りた。

いぬ？

すつ、と障子の開く音が直後に聞こえた。ナオ子の名を呼ぶ声。

「じいさんだ」

ナオ子は小声で言った。

「畑を荒らすから、って、ばあさんと違って動物が嫌いなんだ」

「すぐには出られないね」

人間が降りてくる気配。荒れた畑が、夕闇にも見て取れたのだろ
う。

「おいで。あのエロぎつねみたいな馬鹿ばかりじゃないってこと、
教えてあげるよ」

ナオ子はそう言っただを返した。

闇が降りたとはいえ、人の往来が途絶えたわけではない。二匹は
用心深く茂みや塀の下を進んだ。

集落も中心部分に來ると田畑もほとんどなくて、家が狭い間隔で
建ち並んでいる。マモルは、ここまで集落の中へ立ち入ったのは初
めてだ。

「マモルはどう思うんだい」

足を止めずにナオ子は訊ねた。

「たぬきって呼ばれて、腹が立ったかい」

「ぜんぜん、と答えると、ナオ子は驚いたように振り返った。

「そうかい」

「だって、人間はぼくらの言葉がわからないでしょ。だから、ぼく
らの名前なんて知らないはずだよ。

でもさ、それじゃ不便だから、だから人間は人間の言葉でぼくら
に名前をつけたんじゃないかな」

つと茂みの中でナオ子はうずくまり、しげしげとマモルの顔を見

つめた。

「顔になにかついてる？」

「おめでたい目鼻がついてるよ」

おめでたい目鼻？

顔のことでそう表現されたことはない。どちらかというとい男になれると言われるのに、おめでたいって、どういう意味だろう？
「そういえば、ナオ子さんはどうなの？ねこって呼ばれるの、どう思う？」

ナオ子は後ろ足で耳の後ろをかきながら、少し考える素振りをした。

「あたしはね、あたしのことを誰がなんて呼ぼうが、知ったこつちやないのさ。好きなように呼べばいい。」

名前つてのはね、言ってみりゃただの記号だ。

コンと泣くからコン吉、ぴょんと飛ぶからピョン太。黒いからクロさ。

だからさ、マモラートがたぬきだろうが、どんな違いがあるんだい」

「でも、お父さんは、ぼくはマモラートでたぬきじゃない、マモラートの誇りを持て、って」

「マモルのお父さんのことをあたしが詳しく知ってるわけじゃないけど、マモラートという名前をとっても大事にしているのかもしれないし、たぬきって名前が嫌いなのもかもしれない。」

でも、それはお父さんのことだろう？

マモルはマモルの考えでものごとを感じていかないといけないよ。もちろん、自分の考えを得るために、いろんな人の考えに耳を傾けないといけないけど。

さつきはああ言っただけ、あのエロぎつねの言うことも、考えの一つとしてはある。あたしとしては、マモルみたいな子たぬきに、あのエロぎつねのたわ言を鵜呑みにしてほしくないってわけだけださ」

マモルにはいまひとつわからない話だ。

さらにしばらく進んで、ここだよ、とナオ子は白い塀にぴよんと飛び乗った。マモルは隙間を探し、けっきょく門から庭へと入っていく。

突然ふかふかしたなにかにぶつかって、マモルは慌てて後ずさった。

「悪さはしないよ」

近くでナオ子の声がする。

「おとなしいもんさ」

首に鎖をつなげられたカンドウスだ。

首筋が白く、背中が明るい茶色。マモルを見つめる大きな目はやさしそうで、大きな舌を出している。

正直カンドウスをここまで間近に見るのは初めてだ。

大きい。見上げる巨漢と言うか。横幅も凄い。全力でぶつかっても、一ミリだって動かせない自信がある。おまけに凄い鼻息だ。これは、怖い。

ナオ子さんがいなければ迷わず逃げている。なぜ逃げないのか？それはマモルくんも男だからだ。

「お久しぶりね、チビ」

「久方ぶりだ。」

もつとも、ナオ子姐さんの噂はあちこちの野良からよくうかがうよ。ビビ姐さんとは手打ちにしたそうじゃないか。祝着だ」

「もともとあつちが横車出てきただけさ。うたしはなんにもしてない。まあ、ビビの一人相撲さね」

「ナオ子姐さんらしい言いようだな」

ところで、この小さな子たぬきは」

チビは顔を突き出して、マモルの体に鼻をくつつけるようにして匂いを嗅いだ。それはもう音を立てるほど執拗に。

全身をチビの鼻センサーが探知していき、尻尾の先までいって、満足そうにうなずいた。

「悪い匂いはしない。コン吉の匂いが少し気にさわるが」

「あのエロぎつねにたらし込まれたのさ」

「姐さんの腹立ちもわかるが、あれで悪気のない男だ。少々のホラ話は子供には楽しいものであるうし、口で言うほど大それたことのできる動物でもない」

「海を渡ったとか保健所の職員をケムに巻いたとか、そんな話だけなら罪もないけどね。」

「よりにもよって、こんな子供に変なことたきつけやがってあのアホウ」

コン吉の話を手短に話すと、なるほど、とチビは重そうな頭で鷹揚にうなずいた。

「それで私のところに」

チビはマモルへと向き治り、ごつくと唾を飲んでまた口を開いた。

マモルは硬直している。逃げてはいないが、怖いことに変わりない。クロは乱暴者だし、縄付きにも吠えられたことがある。意地と根性で立ち止まっているだけだ。

チビは微笑し、一歩後ろへ下がった。

あ、このおじさん、もしかしてやさしいの？

「私から話そうかな。」

私はカンドウスとも呼ばれるが、どちらかというと犬と呼ばれる方が嬉しい。ご主人は私のことを犬と呼び、チビと言う名をつけてくださった」

マモルは首をかしげた。

「人間に名前をつけられた？」

「私にとって最も優先すべきは主人のことだ。主人が、お前は犬だ、と言えば私は犬だ。チビだ、と言えば私はチビなのだ。そして、主人のつけてくださった名を名乗れるということに、私は至高の喜びを感じる」

「主人って、人間だよな」

「そう、コウタロウ様といって実に優秀なブリーダーだ。御歳十二の若者だが」

さっぱりわからない。なんで人間が主人になるの？主人が死ぬと言えば死ぬのだろうか。

「いぬには、そういった性がある」

チビはやわらかく微笑み続けた。

「己れの主を選び、これに仕える。主人危急の際には馳せ参じ、死ぬと申されれば喜んでお役に順ずる。

もつとも、人間を主と慕う者ばかりでもない。野生の群れでは、リーダーのいぬに忠誠を誓うものらしい」

「クロは群れないし、誰の言うことも聞かないよ」

「クロか。噂では聞く。嘆かわしいものだ。ああいういぬが増えると、我々の忠義の道は時代の波に翻弄されているのではないか、という気にもなる」

「何度聞いても、あんた、バカだよねえ」

マモルを連れてきた張本人のくせに、ナオ子はいくびをしなから言い放った。

「自分が楽しけりゃいいじゃないか。誰の指図だっていらないよ。人間なんざ、ハッ、放っておきゃいいのさ」

「そういう姐さんも、家のばが熱を出すと大騒ぎするではないか。聞いたぞ。たしかこうわめいていたのだったな。死ぬー、死んじまうー、ばあさんがー」

「そッ、そそそそりゃあ、一宿一飯の恩ってやつさ。義理人情は渡世の金剛石だからね」

なにはさておき、とナオ子は誤魔化すようにマモルの頭を前足で軽く撫でた。

「こういうバカもいるってことさ。

マモル、エロぎつねの言うようなことばかりが世の中で幅をきかせてるわけじゃないんだよ」

それからふと、おもむろにチビへ顔を向け、不思議そうに首をか

上げた。

「・・・・・・・・ちようどいい、このさいだからあたしも一つ質問」
「なんだね」

「前々から思ってたんだけど。」

「あんた、たしかセントバーナードとかいう血統だろ」

「うむ。私の遠い遠い遠い遠い遠い遠い遠い遠い遠い遠い血筋の者がサン・ベルナル修道院に飼われ・・・」

「その図体でチビって名前はねえ」

「私も昔は小さかったのだ。その私をまだ幼くしておられた主人が指差され、一言、チビ、と・・・」

「あ、噂のコーターが来た。晩飯の時間かい？いい匂いだね。」

「じゃ、あたしは行くよ。」

「こら、マモル、あんたも行くの。なにぼつとしてんだい」

人間？

考え考え歩いていたせいだろう。ナオ子とはぐれてしまったことに、ようやくマモルは気付いた。

闇の中の道路。ところどころ街灯が地面を丸く照らしていた。両側は木や石や様々な材質の塀が並んでいて、木立ちでその用をたしているところもある。

間違はなく、マモルの知らない世界。

塀は表面が平坦で真っ直ぐ伸び、しかも幅がとてつもなく広くて、のしかかってきそうな圧迫感がある。森の木より低いはずなのに、どんな巨木よりも大きなものに見えた。

そんな塀が見渡す限り続いている。マモルは怖くなって、茂みを探し飛び込んだ。

ナオ子のなを呼んだが、返事はない。何度も茂みの前を人間の足が過ぎていく。

合間に、ふと時間が、穴に落ちたように、ぱたりと人間の気配が消えてしまうこともあったが、マモルは茂みから出ることができなかった。

何度もナオ子の名を呼んだ。

彼女がいなければ、集落から出られない。方角はわかるけど、恐ろしくて体が動いてくれない。

本当に心細くて、お父さんやお母さんや兄弟やスグルくんアカリちゃんの名を呼んだ。

全身の毛から力が抜けて、ひげが地面をこすっていた。

コン吉おじさんが来てくれないだろうか、なんて考えている。

昔話に出てくるような、勇敢で賢いマモライトが助けに来てくれないだろうか。

いつも空想していた。

ぼくが、と。知恵と勇氣と友情で、人間たちを散々に振り回し、

マモライト汁にされそうな友達を、ぼくが、颯爽と救い出すお話。
お笑い種だ。ぼくが救いを求めている。勇気もへちまもなく、ただちぢこまって震えている。窮地を脱する知恵もない。

ああ、今まで気にならなかったのに、なんだってアスファルトつてやつはこんなに臭いんだ。なんだってこんな時に……..
と、マモルが自分の不甲斐なさを身も世もなく嘆いていたその時、上から声がかかった。

茂みの中から見上げると、見知らぬミーフーナが塀の上で

「見つけたよ」

と背後の何者かへ言っている。

ナオ子さんの仲間だ！

「あ、駄目ッ」

嬉しすぎて制止の言葉など耳に入らない。急いで茂みを飛び出していた。ナオ子に会える、そう思った瞬間、山に捨てられてるトランポリンを胸の中にもしかけているように、心がスポンと弾けたのだ。

ところが、マモルの足は瞬時にして止まった。

「たぬきだ」

人間の子供は驚いたように声を出し、すぐに、たぬきだあ、と今度は黄色い声を張り上げて身をかめた。

なんてことだ、よりもよって人間の足元に飛び出してしまった。マモルの心はトランポリンのないところに落下して砕けそうになった。あまりの急転直下に、逃亡をうながすはずの本能までが凍り付いて、足がすくんでしまった。

逃げなきゃ、逃げなきゃ。そう思いながら、マモルはへたりとその場に転がった。

「死んだあ」

死んだことを喜んでいるのか、子供はマモルを両手で掴みあげると、きゅきゅと跳びはねた。

親だろっ、男の大人が一人近づいてきて

「生き物は大切に」

と通りいっぺんの説教をしている。

「ん、ぐったりしているね。死んだんじゃないよ。たぬきはね、びつくりすると仮死状態、つまり死んだフリをするのさ」

死んだフリじゃないよ、腰が抜けたんだ。

そんな不名誉な訂正をしたくても、強く握られていて声も出ないほど苦しい。おまけに心臓がばくばくいつていてやつぱり苦しい。

皮をはがされるの？置物？首巻き？マモラート汁にされちゃうの？

塀の上では

「言わんこつちやない」

とか

「マモル、助けが来るから頑張るな」

とか言っている。その中にナオ子の声を聞いて、少し元気を取り戻したような気がしたが、気がただけで、実際もうなにがなんだかわからない。死への、というより今後マモルの身の上に起こるであろう残酷な仕打ちへの恐怖で、それこそびつくり死んでしまいそうだ。子供があんまり振り回すから、なんだか気持ち悪くなってきた。「来たよ、マモル、頑張るんだよ」

なにが来たっていうんだろ。

薄れかけた意識の中で、マモルは、最も聞きたくない声を聞いた。カンドウスの唸り声。それも、こいつは、凶悪な大型野良カンドウス、悪名高い一匹狼のクロの声ではないか。

もしかして、人間とクロとでばくを取り合うの？

最悪の想像だった。

人間に捕まったらマモラート汁。クロなら生のままぺろり。どっちに転んでも誰かの胃の中におさまってしまう。どっちの方が楽に死ねるだろう、とまで考えてしまう。

うわん、と盛大な咆哮が轟き、驚いたのか、子供が握っていた拳を離した。

クロは、子供の手から転がり落ちたマモルの体をくわえ、人間の

親子に一瞥を与えて走り出していた。

クロのお腹の中か、と途切れるマモルの意識が最後に思った。
クロのうんちになるのか・・・

クロ？

「生き返ったあ」

気がついて、最初に聞こえたのはナオ子の声だ。心なしかしめっぱいが、嬉しさが顔を見なくてもわかる類の声だった。

「だから大丈夫だって言っただじゃないか。大騒ぎしちゃってまあこれは聞き覚えのない声。」

「だけどさ、ビビ、もしこの子になにかあったら、全部あたしのせいなんだから。親御さんにはなんて言えばいいのさ。どんな顔して会えっていうんだい？」

「はいはい、わかったわかった。ほら、坊やが苦しそうにしてるよ」

「えッ、マモル、ああ、目を覚ましたんだね。痛いところないかい」マモルは起き上がって小さく痛くないと告げた。

ナオ子が間借りしている家の庭だ。家からはもう明かりは漏れていない。ナオ子の隣にいるミーフーナがビビなのだろう。そして・

.....

「うわあ」

闇夜に漆黒の体毛が溶けてしまっというように見えた。鋭い眼光が、赤い舌と白く鋭い牙の上に座っている。

クロだ。

「マモル、失礼だよ、そんな顔しちゃ。お前さんを助けてくれたんだから」

記憶が甦っていくにつれて、マモルの体が震えだした。人間に捕まったときの恐怖が今さらのように寄せてきて、そしてクロにくわえられたときの絶望感。

「あれ？」

「変な顔するんじゃないの。クロが助けてくれたんだよ。」

クロが里に下りてるのを偶然見かけてね、万が一のときには頼むよ、ってお願いしてたのさ。

ああ、それにしても間に合って本当によかった。

さあ、きちんとお礼を言いなさい」

マモルは自失呆然だ。

「クロが、あ、いや、クロのおじさんが助けてくれたの？」

答えようとせず、クロは立ち上がるとゆっくり踵を返した。

「ちよつとクロ、待ちなよ」

「礼が聞きたくて手を貸したわけではない」

クロは振り向きもせずと言った。

「わお、クールねえ」

ビビがとつとつとクロの足元へ近づき、ごろにゃん、と黒く逞しい足へ頬をこすりつけた。

「好きよ、そういうの」

「ねこがいぬに似た作ってどうしよってんだい」

まったく、とビビをはたいてから、ナオ子はクロの前へ回りきちんと座った。

「こういうことは、ちゃんと収めないと許せない性分なんだね。

クロ、本当にありがとう。あんたがいなかったら、マモルがどうなってたか知れない。

この恩、けっして不義理にはしないよ。あんたなら困ることなんてないだろうけど、ものによっちゃあたしの方が気楽にできることもあるからね、なんでも言っておくれよ。死ぬまであたしはあんたの味方さ」

「気持ちだけは収めておく。これでいいか」

「まだだよ。マモル、おいで。

いいからおいで。

噛み付きやしないよ。

一度はこのでっかい口にすっぱりおさまった体だろ」

その口の中がどれだけ恐ろしい場所か、ナオ子さんは知らないのだ。などとマモルは思いつつ、言われた通りクロの前へ回り込んで殊勝な声を出した。

「ありがとうございました、クロのおじさん」

鼻を鳴らして、クロはべろんとマモルの体を舐めた。

マモルはゾツとした。

「それともうひとつ」

ナオ子の声に、クロは胡乱な目つきで小さな姐御を見下ろした。

「まだなにかあるのか」

「今度のことは、あんたに迷惑かけて申し訳なかったと思う。ただ、ちよつとね、ついでといっちゃんんだけど、迷惑ついでにもう一つ頼まれちゃくれないか」

あのクロを相手になんて図々しいんだ。マモルはときどきしながらナオ子の度胸に驚いた。かつこいい。

そのびくびくおどおどのマモルの尻を、ナオ子が鼻で押し出す。

「この子を山に届けてくれないかね」

ええッ!?

「断る」

「頼むよ、この子、足を怪我してるみたいでね」

マモル本人が一番驚いた。痛みなんてどこにもない。

マモルの顔を見てナオ子は妙な笑みを浮かべ、彼の後ろ足をむんずと踏んづけた。途端に痺れるほどの痛みが走って、マモルは不覚にも悲鳴をあげてしまっていた。

違うよ、ナオ子さん、怪我してたんじゃないよ、今の蹴りが関節にきたんだ、くう痛い。

抗議しようとしたが、ナオ子に睨まれてしゅんとなる。

しばらく考え込むようにマモルを見つめていたクロは、つと四肢をかがめ、乗れ、と短く命じてきた。なにを考えているのかわからない、低くて凄みのある声だ。

原因はどうあれ痛む足では朝までに山へ帰れない。かといって、クロの背中に乗りでもしたら、そのまま彼の巢へ直行して明日の保存食にされかねない。

マモルがおどおどしていると、ナオ子とビビが二匹がかりで首根

つこをくわえ、ずるずる引きずっていった。

「大丈夫なんじゃない？途中で気が変らないかぎり、食われないさ」
気が変ったらどうするの。

「バカ、ビビは黙ってな。クロが子供を食うわけじゃないじゃないか。
いいかい、マモル。クロはたしかにおっかないオスだけど、嘘だ
けはつかない。このナオ子姐さんが保障する。」

足が治ったら、友達連れて遊びに来な。ばあさんにねだって、旨
いさんまを食べさせてあげる」

クロの背に乗ってしまったマモルには、もう震えながらもうな
ずくしか法がない。

二歩ほど進んでから、クロはおもむろに振り返り、言った。

「クロウだ」

は？と口が開くナオ子とビビ。

「俺のことはクロウと呼べ」

「なあにが足の怪我よ」

二匹のねこはじゃれあうようにして言い合っていた。

「クロへのお礼のつもりでしょ？ナオ子、あんた、クロに気がある
んじゃない？」

「バカ言っでないで帰んなよ。ここはあたしン家だよ」

「正直に言いな。ほれ、ほれ」

「いぬなんかに気もなにもあるわきゃないだろ。年中色気づきやが
って、この色情狂。今は発情期じゃないよ」

「オスの方がこの美貌に狂うのさ」

「ああ、そうかい、好きにしな。ただし、この家の敷地の外でね。
さあ帰れ！」

強さ？

生まれて初めて味わう疾走感が、やがてマモルの心中から恐怖を取り除いていった。

速い。

それも、マモルたち小動物の敏捷さではない。少々の障害などものともせず、一直線に目的地へ突き進む、逞しい疾駆だ。

茂みを倒木を跳び越え、低い枝をくぐり、急斜面を一気呵成に登りつめる。穴も小川もおかまいなし。

それでいて背中にしがみついているマモルは、振り落とされそうになることもない。クロが背中を気にして力を抑えていることは一目瞭然だった。

本気で走るとどれほど速いのか、マモルでは垣間見ることすらできない世界だ。

ただ、今の疾走感だけで、彼は満足していた。普段走っている時とは風が違う、周りの景色が飛ぶように過ぎていく、宙を跳ぶ浮遊感など初めて知った。これが、この躍動が「走る」ということなのか。

「おじさん、凄く速いんだね。ぼくもそんなに速く走れるかな」
木々の多い山に入るとペースは落ち、マモルは喋る余裕も出てきた。

クロの返事はない。

なぜか必ず答えが返ると思い込んでいた少年は、その無言にひどく落胆した。そして、同時に思い出していた。こいつは、あのクロなんだぞ、と。

ところが、しばらく経ってから、やおらクロが口を開いた。

「たぬきにはたぬきの走りがある。俺には真似できない」

答えの内容よりも、クロが返事をしてくれたとが、妙に嬉しかった。こいつは、あのクロなんだぞ、と思いながら、マモルはにやけ

てしまう。

「そんなことないよ、おじさんの方がずっと凄いな」

言ってから、おや、と思った。今、自然に、たぬき、という言葉が耳に飛び込んできた。

「おじさんも、マモラートのことたぬきって呼ぶんだね」

クロは無言。

「ねえ、おじさん。おじさんは、人間からいぬって呼ばれるの、いや？それとも、それは嬉しいことなの？」

しばらくしてから、クロは答えた。

「人間に飼われていたなら、いぬと呼ばれる方が自然だ」

「じゃあ、おじさんはカンドウスじゃなくて、いぬなんだ」

「俺はクロウだ。誰にどう呼ばれようと、クロウ以外の何者でもない」

マモルはちよつと考えた。

「おじさんの主がつけた名前なの、クロって？」

「そうだ」

「人間？」

「そうだ。身寄りのない老人だった」

これは意外だった。乱暴者で、強くて、速いクロの主が、年若い人間だったなんて。クロの方が強くて速いに違いないのに。

「その人間は？」

「死んだ」

「それじゃあ、今は主はいないの？ずっと一匹なの？」

「そうだ」

「だけど、それじゃ寂しいでしょ。いぬは主を選ぶのが性だって聞いたよ」

「いぬの世界には、二君にまみえず、という言葉がある。まあ、今時そんなもの、律儀に守るいぬなど、そうはいないがな」

クロが低く笑った。マモルには理解できなかったが、自嘲の笑みとも苦笑ともとれる笑いだった。

それにしても、とマモルは不思議に気付いた。あのクロが、矢継ぎ早の質問にそれこそ律儀に答えている。ちよつと彼を見直した。

「おじさん、やさしいんだね」

またクロが笑った。

「今は満腹だ。腹が減っていれば、お前はえさ以外のなにものではない」

今までにない壮絶な凄みのある声と言葉だった。

瞬時にしてマモルは震え上がった。

「だ、だだだだれか食べたの」

「あの里にある喫茶やわらぎの残飯は、なかなかいけるのさ」

ちよつと怖がらせすぎたとも思ったのだろうか、クロは心持ち声をやわらげた。

「俺は当然のことを言っただけだ。腹を空かした野良にとっては弱い動物は食い物だと。安心しろ、言っただけに今は満腹だ。お前のことはきちつと送る」

たしかに、考えてみると当然のこと。それは、危険なときに友達を犠牲にして生き残る話に似ている。

野良カンドウスは食べるために動物を殺す。それは恐ろしいことだけど、だから無闇にクロを恐れることはない。出会った動物を手当たり次第に殺すわけじゃないんだから。マモルだって、なにかを食べないと生きていけない。

「だけど不思議だな」

マモルはさきほどの疑問をぶつけてみた。

「おじさんの方が、人間なんかよりずっと強いじゃないか。人間はこんなに速く走ることだってできないよ。なのに人間が主だなんて」

ふと、クロは立ち止まった。

「人間は、強い」

「え？てつぱうとか持つてるから？でも、道具なしなら、おじさんの牙の方が強いよ」

「いや」

クロは、眼下の街灯に照らされたアスファルト道路を見やった。

「人間は速い。車は知っているな？道路の上には、俺でもあれには勝てない。速く、しかもいつまでも走り続けることができる」

それぐらい知ってるよ、と言おうとして、先にクロが喋りだした。

「人間は速い。だが、そのために、人間はもう走れなくなった」

「え？」

「車というのは、性能を発揮するために道路が必要だ。だから、人間は森の奥、山の頂、川の上にまで道路を敷き詰める。道路の上でしか、走ることができなくなったからだ」

クロはゆっくり歩き出した。

「人間は強い。道路を敷き詰めるために、木を切り倒し山を削り川を濁らせ、動物たちを殺していく。俺は食うために殺すが、人間は違う。牙や爪ではなく、銃や刃物でもなく、人間のその心こそが強さの源だ。だから、どんな動物より、人間は強くなれる」

難しい話だ。だけど、きっと大事な話だ。マモルは心の中で何度もクロの言葉を反芻させた。覚えていたら、大人になったとき、わかる。

さる？

難しい話のあと、クロはあまり話してくれなくなった。

彼の口について出る言葉は「うむ」とか「いや」とか、「その通りだな」とかばかりだ。

どんな話なら気を引けるだろうかと色々試したマモルだが、けっきよく自分の身の回りのことぐらいしか子供の頭に話題はない。

スグルや友達との遊び、アカリへのほのかな恋、物知りなお父さん、お母さんはとても強い。

「ボクもおじさんみたいに強ければ、お母さんに怒られたりしないんだけど。なにか言ったら、がおッ、ってやればいいんだ」

「感心はせん。俺もそんなことはしない」

おお、話題に食いついてきた。

「だってさ、ちょっとしたとですぐ怒るんだ」

「親なら当然だ。子供なら・・・まあ、適当に聞き流す芸当くらいは身につけるのだな」

ふうん。マモルは面白くなさそうにあつちを向いた。

お母さんより強い自分。妄想としては面白いのに。

「でも、本当にぼくの方が強くなったら、お母さんは怒らないよね」
クロは立ち止まり、考え込むようにして自分の胸から首筋辺りを舐めた。

「強さには質がある。たとえ親より子の方が強くなっても、子を叱るときと、子を守るとき、親はとてつもない強さを発揮する。間違いないく、自分より強いはずの子よりも、大きくなる」

マモルはちよつと目をぐりぐりした。

「おじさん？」

「だから、叱る親をねじ伏せようとは考えないことだ」
それは勘違いだ。

「違うよ。そんなことしないよ。ぼくはお父さんもお母さんも好き

さ。ただ、おじさんみたいに強くて、賢くて、凄い動物になったら、帰りがちよつと遅くなっても誰も心配しないし、怒られるようなことだってしなくなる、っていうことだよ」

少し沈黙してから、クロは笑った。

「そうか、これは悪かった」

「ひどい誤解だ」

「悪かった。しかし、俺のように、と言ったが、別に俺のようになる必要はないし、なられても困るぞ」

「なんでさ」

「強さの質が違うからだ。たぬきにはたぬきの強さ、たぬきの知恵がある。時に俺も及ばぬほどのものが。お前はそれを身につければいい」

そんなものがあるわけない。と、いつもなら一蹴するところだが、マモルはここで考えた。

クロは嘘や誤魔化しは言わない。それは、話をして、子供なりに感じたことだ。

でも、それはどんな強さだろう。どういう知恵だろう。マモルは気分が滅入った。

それは、茂みの下で小さくなって震えていることだろうか。

「きつとぼくは駄目だ」

なぐさめてほしいわけじゃない。自分をいじめたいわけじゃない。ただ、ただ自分の不甲斐なさ、今まで知らなかった脆弱を、吐き出さずにはいられない。

「今日、ぼくはなにもできなかったんだ。人間に見つかったとき、怖くて、怖くて、尻尾のさきっちょも動かせなかったんだ。逃げることもできなかった」

こんなはずではなかったのに、と、クロの背中へしがみつく四本の足に力が入った。

「おじさんみたいに強かったら、そしたら……」

「俺もガキの頃はそうだった」

「え」

「見知らぬ人間が恐ろしくて、震えが止まらなかった」

「嘘だ」

「本当だ。子供とはそういうものだ」

驚愕だ。今日最大のびっくりだ。クロは生まれつき強くて怖い動物だと思っていた。

「気にするな。明日辺りに、もし人間に見つかったら、その時には前足が動くようになっていくはずだ。その次のときには後ろ足が動くだろう。少しずつ、一つずつ大きくなっていくといい。急ぐことはない」

それから急に声の調子を変え、クロらしくもなく冗談めかして、「ところで」

と背中をゆすった。

「いつまで背中にいるつもりだ」

マモルは言われて辺りを見回し、ああッ、と声をあげた。

おしゃべりに夢中で気付かなかった。すでにマモルの巢の近くまで来ていた。それも凄く近い。

もっとも、気付けないのも当然、いつもより高い位置、クロの背中へへばりついて見る光景は、いつもと同じ場所なのにまるで違った景色を作っていたからだ。

あれ？とマモルは首をかしげる。

今まで一度も道案内をしていない。なのに、なんでクロはここへ来れたのだろう？

「おじさん、まさかとは思うけど、ぼくの巢の場所、知ってるの？」

「俺の鼻にわからないことはない」

ああああッ

叫びそうになった。

つまりそれは、クロが空腹になったとき、一家全滅の危機に陥るということなのでは？

引越しか、でもスグルくんと会えなくなるしなあ……

「ほら、降りろ。これ以上近づけば、親が騒ぐ。それに」

クロはこれみよがしに鼻をひくつかせた。

「苦手なやつもいる」

「おじさんに苦手な動物がいるの？」

「説教はごめんだ」

クロの背中を降りたマモルは、闇へ溶けていく漆黒の影へ、心の底から言った。

「ありがとう、クロのおじさん。本当に。また、背中に乗せてね」

「クロウだ」

闇の中から、声だけが返ってきた。

「俺のことはクロウと呼べ」

クロの尻尾を探すように、マモルはしばらくその場にたたずんでいた。

こりゃ、という声が聞こえたのは、しばらくしてからだ。後頭部になにやら当たって、思わず悲鳴が漏れた。

「なにやっとなるか、マモル」

しわがれ声は、聞き間違えようもない、長老のモン兵だ。

マモルは振り返って、飛んできた小枝を器用に避けた。

他の動物の気配は感じない。してみると、クロの苦手な相手というのはモン兵だろうか。

「なんだよ、モン兵じいちゃん、またヒステリーなの」

「誰がヒスだ。言葉の意味も知らんで。生意気小僧め。さんざ心配したぞい」

前半はいつも言われていることだが、心配という言葉は初耳だ。

「心配？」

「当たり前だ。行き先も告げずにこんな時間まで呆けておってどこ探してもおらんから、お前の母ちゃんなんか巢で寝込んでしまった」

しまった。マモルは舌打ちしなくなった。

コン吉にちょっと会って、すぐに帰るつもりだったのだ。それが

思わぬ事態で時間がかかった。もうすぐ日が昇る時間である。今まで、こんなに長く黙って巣をあけることはなかった。

「じいちゃん、あのさ」

「おまけにクロの背中にくくられて帰るとは。とうとうあやつ、餓鬼に落ちてお前を歯牙にかけたのかと、ハラハラしたわい」

モン兵は掴んでいた小枝を背中へ放り投げ、毛のない顔を赤くして近づいてきた。

二本の足で動ける動物を、マモルはモン兵以外に知らない。動物と人間の合いの子だ、なんていう陰口を利いたこともある。あの時、マモルは腹が立った。

変なことを言うおじいさんだし、投げる小枝の殺傷力は近年だいぶ衰えたらしいが厄介だし、とにかく奇妙な動物だが、なぜかマモルは彼が嫌いではない。

もつとも、好きでもない。

ただ、何日か会えなかったりすると、ひどく寂しく思うことがある。

おや？マモルは思った。

「クロのおじさんのこと、見てたの？」

「うむ」

「じゃ、なんで今まで出てこなかったの？もしかして、クロのおじさんのこと、怖かったの？だったら平気だよ。おじさんはそんなに怖い動物じゃないよ」

「バカいえ。誰がクロなんぞ恐れるものかよ。だいたい、わしのような老体は、肉が固くてあやつの口に合わんそうだ」

「でも、じいちゃん、泣いてたみたいな顔してる。怖かったんでしょ」

からかうつもりはない。クロがいかにやさしいおじさんか、なんとか説明しなければと一種の使命感を感じていた。

モン兵はハッとして器用な手で顔をごしごしこすり、ふんツと鼻を鳴らした。

「とにかく、帰るぞ。親父連中は総出でお前を探しに行ってるが、じき戻るだろ。それにしてもお前、今までどこで、なにやってたんだ？」

うん・・・

マモルはちよつと考えてから、あのね、と切り出した。

今日一日あったこと。二つの名前、ナオ子さんたちのこと。

聞き終えてから、モン兵は頭をぼりぼりやって、よいこらしよと尻をついた。

モン兵は普段、人間の手に当たる前足も地面に突いて歩くが、それでも頭の位置は高い。今も、マモルを見下ろす形になった。

「お前さんもそういう歳かね」

「どういう？」

「自分がなにものか、自分の立つ場所がどこなのか、考える年頃ってことさ」

またわけのわからない話をする。いつもそうだ。簡単なことを小難しく話すのだ、このじいさんは。だから、マモルはモン兵が好きになれない。

「わしはな、さる、だ」

モン兵じいちゃん？

モン兵は頭をぼりぼりかいた。

「さるにもいろいろあるらしいが、わしゃ知らん。知る前に人間たちから逃げてきた。」

お前も知ってるように、この山にはわしの同類がおらん。別の場所にはおるだろうが、この辺りじゃ見かけん。だから、動物たち仲間うちからさるがどついう名前と呼ばれているのか、わからん」

「それって、寂しい？」

モン兵は右を見て左を見て、恥ずかしそうにわき腹をぼりぼりやった。

「ここだけの話だぞ。」

昔は、寂しいと思ったことがある」

「本当に、同じ種族がないの？」

「似たやつらに会ったことはある。しかし、さっきも言ったが、さるにもいろいろある。同類じゃないから帰れと追い返された。あの時は寂しかったな」

マモルは地面を見つめた。とてもモン兵の顔を見ていられなかった。

なんで今まで考えなかったんだろう。同じ種族の仲間が一匹いなくなったら、寂しいに決まってる。そりゃあ、枝だの石だの投げたくもなるだろう。

「自分が誰で、なにものなのか、わからん。誰も教えてくれん。」

しかたがないんで、自分で考えてみた。

で、だ。あるとき、ふと、思いついたことがあった。

わしゃモン兵だ、と」

意味がよくわからなくて、今度はまじまじとモン兵の顔を見た。

「なんだよ、それ。そりゃモン兵じいさんはモン兵じいさんさ」

「そうではない。」

動物である前に、さるである前に、モン兵なのだ。自分が自分であるということこそが、自分がなにものなのかという答えなのではないか、と思つたわけだ」

またわけのわからない話をしだした。

「まあ、そうだな。」

ピョン太は知っているな。隣山の池に住んでいる。

あやつは、何十代か前のご先祖が人間のシャツに入り込んで、ごつい人間に頭突きをかましたりしたという伝説を、真剣に信じておる。そのことを誇りにしておる。

その誇りがあるから、あやつは人間にかえると呼ばれ踏んずけられても、全然平気だ。

俺はぴょん吉様の子孫だ、という確固とした己れがあるからだ。

わしの場合、それが、モン兵だ、ということだ」

「全然わかんない」

「ええい、面倒なやつめ」

怒つたように胸をかきむしり、モン兵は斜め四十五度でウキキと吠えた。

「種について悩むより、モン兵としてどう生きるかを悩んだ、と言つておるのだ」

んむふー、と鼻から息を吹きかける。

いつもの長話が始まる前兆だ。よくわからないけど、これはわかつたことにした方がよさそうだ。また今度、ゆっくり聞こう。

「ところでマモル」

必死にうなずき続けているマモルへ、不意に声を落としてモン兵は訊ねた。

「クロとはなにか話したか？」

「うん、たくさん」

「たとえば、その、あー、たとえば、昔の話とか」

「主が年取つた人間だったんだって。変だよ、クロのおじさんの方が強いのに」

「他には？」

「その人間、身寄りがなくて、もう死んだって」

モン兵はやりきれないというように首を振った。

「まだ死んだ主を忘れられんのか。愚かなやつだ」

「オロ力なんかじゃないよ、とつてもやさしいんだ。また背中に乗せてもらうんだよ」

「マモル」

沈痛な面持ちで、モン兵は背中をかいた。

「クロには近づくな」

「なんでさ」

「いつか、食われる」

「そんなことないよ」

二匹はにらみ合うような形で沈黙した。マモルは意地を張って、モン兵はなにやら考え込んでいる様子で。

クロはな、とモン兵は言って、ちよつと黙った。

「クロはな、つがいで飼われていた」

「奥さんと・・・・・・」

「子供もいた。訊いた話じゃ、別れたのはお前くらいの年頃だったそうだ」

今日最大の驚愕レコードが更新された。まさか、バツ一。

「なにかよからことを考えている顔だな。たぶん、想像とは違うぞ。三匹の親子は、主人の死で、野に放り出された。実際には、クロのやつが二君にまみえんとか意地になり、妻も納得して、だと聞いている。」

その後だ。

現場をわしが見たわけではない。が、話には聞かし、実際、クロの体はこの目になっているから、わかる。

路頭に迷ったクロは、必死で妻と子を守ろうとした。だが、クロ一匹でなにができる。保健所の職員にどうやって歯向かえばいい。

あやつは、妻が、子が、連れ去られるのを、抵抗の限りを尽くし

ても防ぐことができなかった。己れの命一つ逃げ出すことしかできなかった。

あやつの背に乗ったなら見ただろう、体中の傷を」

シヨックだった。別次元の疾走に酔って、おしゃべりに夢中になり、傷なんて見えていなかった。

「あやつはすべてを失った。主たるべき人間に、すべてを奪われたのさ」

マモルの心中に、今までなかった感情がわいた。

人間めッ！

憎悪。

クロの体の傷に気付けなかった自分へ向ける嫌悪も、憎む他者へ方向転換できた。誤魔化した。だが、それだけではない。今まで、恐れる対象だった人間を、本当に憎く思った。

そんなマモルの心中の変化に気付かぬ様子で、モン兵は続ける。

「そのクロの子の名は、マモルと言った。主がつけた名前だろうな。だからだ、マモル、今日食われなかったのは、たまたま、偶然だ。もう、クロに近づいてはかん」

「人間なんか、いなくなればいいのに」

マモルのつぶやきに、モン兵がこりゃいかんと声をあげた。

「そんなことを言うな」

「だって、人間は僕たちを殺すじゃないか」

「しかしなあ・・・」

両手を揉みながらモン兵は困った顔をしている。

「まあ、同じ動物同士、うまくやろうじゃないか」

「誰が同じ動物なのさ」

「知らんのかね。まあ、知らんやつも多いが・・・人間もな、わしらと同じで、動物なんだ」

モン兵の言葉が、すっきりしゃんと頭に入ってこなかった。なんて言ったの？

「だって、だって、人間は道路を敷いて、車に乗って、鉄砲を撃つ

て」

「心臓が動いていて、怪我すりや赤い血がでる。二本足だが、そりや、わしもたまには二本足になる」

「ク、クロのおじさんはお腹がすかなかつたら殺さないって、けど、ぼくは今日、人間に殺されそうになったんだ」

「本当に殺されていたかはわからんだろう？」

モン兵じいさんの話は難しいけど、クロと同じで絶対嘘はつかない。それは知ってる。だけど、人間がぼくたちと同じで動物だったなんて……

「な、同じく動物同士、仲良くやろう。」

まあ、あやつら、自分が動物だってこと、忘れてるんじゃないかと、わしなんか思うこともあるが……思い出すのはナニの時だけだろうな」

「ナニ？」

「大人になりやわかる。」

とにかくだ、たしかにあやつら、自分が一番賢いと思ってる。わしらの本当の名前も知らんのに。ああいう頑固な利口者は度し難いには違いない。

しかし、ま、いなくなれなんて言わずに、ちよつとすり寄ってやろうじゃないか」

「すり寄る？」

「そう、間抜けで愚かで、そのくせ自分が最高だと思ひ込んでる面白おかしい人間を、ほんのちよつと許してやろう」

「でも、クロのおじさん……」

「あやつは今だに主を決めん。群れもせん。それはな、人間は憎い、だが、人間に一縷の望みをいだきたい、そう思っておるからだ。死んだ主は、よほどの人格者だったらいいな。クロ本人が、そうして人間をちよつぱり許してる。お前さんがどうこう言っではいかん」
さて、そろそろ行こうかね。そう言っ立ち上がったモン兵は、ん、と声をあげた。

「そついや、さっきの話。たぬき、だ。この名前、肝心のお前はど
う思っておるんだ」

「嫌いだ」

人間が作った名前なんか。

でも、たぬきにはたぬきの強さと知恵があるんだ。

「でも許してあげるよ」

モン兵は大きな手でマモルの背を撫でた。

巢に近づくと、大勢のマモライトが集まってマモル搜索会議を開
いているのが見えた。

モン兵じいちゃん？（後書き）

結局なにが言いたかったんだ、という内容で終わってしまいました。己れのいたらかなさを痛感いたします。読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1723a/>

たぬきがたぬきでないたぬき

2010年10月8日12時02分発行